

また、宗教学や神学の分野においても、スピノザはある意味、大きな分水嶺である。人間理性に理解不可能な分野をなくし、神の知識を質的ではなく量的な問題に変換することに成功した。つまり、無限な神の存在は、前近代までのように、まったくもって人間理性には把握できない事象ではなく、時間と絶え間ない努力によって、その知識を増やしていくことが可能となった。非合理的な事象は、合理的な説明が可能となり、いつさいの存在は人間知性のうちにとりこまれることになった。このような思考的方法論の大きな基を創出したのは、スピノザである。

もうひとつの「何故」もいま問われるべきであろう。では、何故、十七世紀の改革派神学なのだろうか。本研究の目的は、古くさい神学的正統主義を、復活させることではない。デカルトやスピノザが提唱した人間理性によって理解可能になった自然とも呼ばれる神は、近代以前のキリスト教的神論に依るところが大きく、単純なる回帰は近代思想が指摘した問題点をいっさい無視することになり、知的な真剣味にかける。

むしろ、十七世紀のプロテスタント主義の一翼であった改革派神学を鑑みる理由は、デカルトやスピノザの思想が、ネーデルラントの改革派の人々に、最初に熱意を持って読まれ、同時に、この新しい哲学の最初の反対者となったからである。そして、同時代人であるからゆえに、近代的思考が自明の理になるにつれて、覆い隠されてしまった問題を、この神学・哲学者たちは見いだしていたからである。彼らの解答は、現代的には使えないものである。しかし、彼らの問いかけは、歴史的にみて

も、思想的にみても興味深いものがある。ゆえに、本研究では、改革派哲学者であるゲルハルト・デ・フリースのデカルト・スピノザ主義への反駁をみながら、彼の提示した近代の問題点と、いつさいを超越する神を思考する可能性を探っていく。

第一部では、スピノザの神概念について論じていく。第二部では、デ・フリースのデカルト・スピノザ哲学に対する反駁を論じていく。そして、最後に、神に関する近代的思考の限界と、それを超えていく可能性を、ジャン＝リュック・マリオンの『存在なき神』と初期カール・バルトの『ローマ書講解』を用いて、示していく。

カント哲学における信仰の概念

南 翔一朗

カントは『純粋理性批判』の第二部第二章第三節「臆見、知識、信仰について」と題された部分において、信仰とその意味について、確信 (*Überzeugung*) や思い込み (*Überredung*)、また臆見 (*Meinen, Meinung*) および知識 (*Wissen*) との関係から考察するのであるが、この部分には概念定義上、少々問題が含まれている。

その問題とは、カントが「〈真とみなすこと〉 (*Fürwahrhalten*) が理性をもつすべての人に妥当するなら、その〈真とみなすこと〉の根拠は客観的に十分であり、その場合、〈真とみなすこと〉は確信 (*Überzeugung*) と呼ばれる。〈真とみなすこと〉がたんに主体の特別な性質の中にのみその根拠を持つてゐるなら、それは思い込み (*Überredung*) と呼ばれる」と述べ

ているにもかかわらず、その少し後の部分で「主観的に十分であることは(わたし自身にとつての)確信(Uberzeugung)」と呼ばれ、客観的に十分であることは(すべての人にとつての)確実性(Gewissheit)と呼ばれる」と述べ、「確信」がはたして客観的に十分なものなのか、あるいは不十分なものなのか不明瞭であり、一見すると矛盾しているように読めてしまうというものである。これに対応して、「主観的にのみ十分であり、同時に客観的には不十分な」(真とみなすこと)である「信仰」の主観的および客観的の意味も不明なままにとどまることとなる。

このような問題に対して、本発表ではこれらの記述の前後の文脈から、「客観的」という言葉の意味を二つの観点に分けて理解することによって整合的に解釈する方策を提案した。そうすることによって、確信が思い込みとの関係において「客観的」であるというのは、確信が「理性を持つすべての人に妥当する」という性質を備えているという意味であり、これに対して確信が確実性との関係において「客観的」ではないというのは、理論的關係において、すなわち直接的に客体を把握するという契機を欠いているという意味において、客観的ではないということの意味していると理解することができる。

このように、「客観的」を「理性を持つすべての人に妥当する」という意味での「客観的」と、「理論的な意味、すなわち直接的に対象をもつ」という意味での「客観的」に区別すること、信仰が「客観的に不十分」と言われる場合の「客観的」も理論的な意味において用いられているということ、さらに

「理性を持つすべての人に妥当する」という意味での客観性はおもも保持しているということが推察される。

信仰がこのように「理性をもつすべての人に妥当する」という意味での客観性を保持しうるのも、それが実践的な関係、すなわちすべての理性的存在者に必然的に妥当する道徳およびそれにもとづく最高善との関係を持っているからにはかならないが、これらのことに依拠しつつ、カントは道徳にもとづく限りでの信仰について、「私が私の道徳的な心構えを失うという危険を冒すこともなければ、私から神と来世への信仰がいつの日か奪われるかもしれないと心配することもない」と言う。こうして、カントは道徳と宗教(神の現存在および魂の不死)を結びつけることによって、それらに対する信仰を確固とした揺るぎないものとして提示することができたと考えており、信仰の基盤に道徳を据える自己の立場に絶対の自信を持っている。カントにとつて、神の現存在や魂の不死といった形而上学的対象への信仰は、理性を持つがゆえに道徳的存在者でもある人間の自然本性に根ざしており、人間は自らが道徳的に生きること、またそれに応じて最高善が実現することを願うかぎり、それらを信ぜざるをえないのである。

美的仮象と遊戯——シラーにおける相互主観性の問題——

田口 博子

ハンス・ゲオルグ・ガダマーは『真理と方法』で、遊びの概念について論究している。遊びの概念をガダマーが選んだのは、近代の美学と人間学に支配的な潮流、主観的な意味の強調